

巻頭言

「サツマイモ事典」に寄せて

三重大大学名誉教授 塩谷 格

18世紀の仏思想家D. デイドロは、次のような話をしている。

「山羊からわれわれは精悍で、頭のよい、疲れを知らぬ、脚の速い種属をつくりだすことができ、そうした種属から優秀な召使いをつくることができるだろうってことです。そしたら植民地で人間を牛馬のように酷使しなくてもよくなるだろうと思いますね」

「すてきですわ、先生、もうわたしにはあの馬車のうしろに山羊の趾をした横柄な男が5、6人見えるような気がします。山羊趾男、考えただけでも愉快ですね」

不道徳ながら大胆な推理である。いつか将来は科学の進歩でこうしたことも夢でなくなるかもしれない、と言いたかったのでしょうか。

デイドロは科学、芸術、商業などあらゆる分野を理解するための事典づくりを思いついた。多くの思想家たちの協力を得ながら、22年の歳月をかけ、ついに1772年、「百科全書」17巻、図版11巻の編集と執筆を完結させた。その哲学思想はフランスの今日のラルース百科事典に引き継がれている。

冒頭の話題にもどる。家畜の改良、医学用動物の遺伝的改造、また遺伝子組み換え作物など、今日では慣れっこのトピック。いっぽうでは生物倫理がきびしく問われている。デイドロの話題は今日の話題といっ

ても違和感はないだろう。

数年前、いも類振興会の狩谷昭男氏から「サツマイモ事典」の広い領域にわたる綿密な企画案をみせていただいた。構想はサツマイモの専門分野での百科事典である。ふと若いときに読んだデイドロのことが浮かんだ。とくに冒頭の対話は、育種学を専攻した私には印象的であった。返信にはそのことにふれ、後世まで活用される事典をめざしてください、と書いた。

企画編集委員長小林 仁氏は巻頭言（本誌103号、2010）で、サツマイモの真価の発見と発展のため本事典を大いに活用してほしいという願望の辞を述べている。同号ではまた狩谷氏が刊行の経緯および今後の課題を取り上げ、改訂版の展望まで言及されている。

百科事典が長寿を保ちよりよく活用されるためには、年々歳々新しい知見や情報が加わった改訂が続けられることである。農作物の品種にも世代交代があるように。今年の新しい知識とて明年は古い知識に過ぎないことがある。